

第2回：屋久島のゼロエミッションの試み

屋久島は一説に樹齢 7,000 年以上ともいわれる「縄文杉」の発見を機に世界的に知られるようになり、1993 年のユネスコ世界遺産登録により、屋久島の自然とこれに関わる人々の暮らしが国内外で一層脚光をあびるようになった。また、同じく 1993 年に町議会で議決された「屋久島憲章」には、自然と人間との共生や歴史・伝統、自然の恵みを生かした屋久島らしい町づくり等の目標がうたわれている。自然と共生し、廃棄物を出さない資源循環型の社会を造るために、屋久島では「ゼロエミッション（廃棄物ゼロ）」のシステム作りを目指している。この構想では、1) 島からの化石燃料の追放、2) 島の資源の徹底活用、3) 廃棄物ゼロ社会の実現、の 3 つの目標を掲げている。

このうち、「化石燃料の追放」は、火力発電や自動車燃料として島へ流入する化石燃料（重油、ガソリン、軽油等）をなくすことを目標とする。屋久島は離島にしては水が豊富で、すでに水力発電で必要電力の約 70% をまかなっている、という背景がある。これは「月 35 日雨が降る」ともいわれ、年間平均雨量 4,400mm、年最大雨量 10,000mm にもものぼる、という自然条件に支えられたものである。既存の水力発電に加えて、火力発電に替わる太陽光発電、風力発電、小型水力発電等の最適な組合せにより、エネルギーの島内自給化をめざしている。また電気自動車の導入により、自動車燃料としてのガソリン、軽油の追放も構想されている。

「島の資源の徹底活用」に関しては、資源の自給自足及び地域振興の視点から地場資源の活用を図ろうとして

いる。屋久島固有の薬草・薬樹の開発、温暖な気候を生かした作物・果樹・花卉栽培の導入、豊かな自然資源を生かしたエコツーリズム等の観光開発等があげられる。一方、「廃棄物ゼロ社会の実現」に関しては、一般廃棄物の分別リサイクルや産業連鎖による資源の循環・再利用を図り、廃棄物をゼロにすることをめざす。家庭から出る廃棄物は自家処理によって生ゴミは堆肥化し、産業廃棄物も農林水産関係は様々なリサイクルの試みがなされている。

しかし、可燃ゴミはすべて焼却、不燃ゴミ・粗大ゴミは埋立処理という現状の中で、家具、家電、廃車車両等の粗大ごみの増加や、観光客のもたらすゴミ・排泄物が問題になってきていることも事実である。廃棄物をなくし、資源循環型の社会をめざそうという屋久島での動きは、まだ始まったばかりである。屋久島なりのスケールとテンポで、「島」の特性である "closed system" や「世界遺産」を活かしたユニークな地域開発、あるいは自然との共生のあり方を見つけていってほしい。



太陽光発電



ゴミの不法投棄

電気自動車用の
エコステーション



廃車の山